「子どもの脳とこころを傷つけない子育てとは —日常に潜むマルトリートメント（避けたい子育て）が脳におよぼす影響—」

福井大学子どものこころの発達研究センター
友田明美

私はこれまで、外見からはわかりづらい「こころの傷」を可視化するために、さまざまな「マルトリートメント（マルトリ）」を受けた人の脳の画像をＭＲＩ（磁気共鳴画像化装置）という機械を使って、調べてきました。

その結果、最近、厳格な体罰や暴言マルトリを受けたり、両親間のDVを目撃したりすることで、視覚野や聴覚野といった脳の部位に「傷」がつくということがわかってきました。「マルトリートメント」が発達段階にある子どもの脳に大きなストレスを与え、実際に変形させていることが明らかになったのです。

この傷がずっと続くことから、マルトリを受けた子どもは大人になっても辛い思いをするのです。これまでは、生来的な要因で起こると思われていた子どもの学習意欲の低下や引きこもり、大人になってから起きる精神疾患も、この脳が原因で起こる可能性があることが分かりました。大人が日々、何気なくかけている言葉やとっている行動が子どもにとって過度なストレスとなり、知らず知らずのうちに、こころや脳までも傷つけてしまっていることがあるのです。

また、脳が最も発育する幼少時代に、不適切な関わりのせいで愛着が形成されない場合、特に精神面において問題を抱えてしまうことがあります。具体的には、うつなどの心の病として出現したり、幼少期に問題がないようでも成人してから健全な人間関係が結べない、達成感を感じにくい、意欲が湧かないなどのさまざまな問題が現れたりします。虐待は、たとえ死に至らなくても深刻な影響・後遺症を子どもに残し、過酷な人生を背負わせることになります。虐待の日常化は「支配—被支配」といった誤った関係性を家庭内に生みます。このような環境のなかで暴力の恐怖におびえながら成長した子どもは、他人に対して不適切な接し方を身につけてしまう可能性があります。

一方で少子化・核家族化が進む社会では親も苦しんでいます。育児困難に悩む親たちは容易に支援を受けることができず、ますます深みにはまっていきます。「マルトリの連鎖」が言われて久しいですが、３分の２のマルトリ経験児たちは自らが親になってもマ

ルトリをしないという事実にも目を向けてほしいと思います。現代社会には，育児困難に悩む親たちを社会で支える「とも育て（きょうどう子育て)」が必要です。

養育者である親を社会で支える体制は、いまだぜい弱なのが現実です。虐待を減少させていくには、多職種が連携することで家庭、学校、地域を結びつけ、子どものみならず親たちとも信頼関係を築きながら、根気強く対応していくことから始めなければなりません。

今回、小児期のマルトリ経験と「傷つく脳」との関連性をご紹介しましたが、これらのエビデンス（科学的根拠）に関する理解がもっと深まれば、子どもに対しての接し方は変わっていくはずです。そのことが、子どもたちにとって未来ある社会を築くことにつながればと願っています。